

生活発表会をふまえた身体表現活動について

—模擬保育と振り返りからの検討—

藤元 恭子
(幼児教育)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

A Study of the Physical Expression Activities Based on Performance Day at Nursery Schools : Through Consideration of the Planning of Simulated Childcare and the Reflection

Kyoko Fujimoto

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要旨 身体表現活動を主とした模擬保育を、生活発表会までの日々の活動として位置付け、構想展開する方法について、実践とその振り返りをもとに検証を行った。その結果、保育者としての関わりや発達理解の重要性、身体表現活動の在り方について実感できただけでなく、見通しの必要性や計画があることによる難しさや大切さに気づけたことが示された。

キーワード 生活発表会 身体表現活動 模擬保育と振り返り 授業改善

1. 問題と目的

“模擬保育と振り返り”については、2017年に策定された教職課程コアカリキュラムの目標に掲げられたことで、養成施設における授業の中での位置づけについてその在り方の検討が一層必要となったといえる。

筆者自身も試行錯誤を繰り返しながら、模擬保育と振り返りを授業計画に位置づけている。もちろんそのたびに学生の学びの深まりを実感することはあるが、この経験が保育の現場でどう活かされるのか、そのために、この方法でよいのかと常に問い続けてきた。先行研究では模擬保育とその振り返りの実践を通じて、前述したコアカリキュラムに掲げられた目標における学びが保障される可能性について論じられており、筆者が専門とする身体表現活動においても、学生の協働的な学びを生み出し、主体的、対話的で深い学びが実現する過程を経験する方法について示されている^{1) 2)}。

しかし、その実践形態について概観すると、履修学生をいくつかのグループに編成し、その中で協同しな

がら保育を立案し、保育者や保育補助者として実践するのが一般的となっている。この方法では、それぞれのグループごとに単発で行われ、実際の保育における子どもの経験の連続性を想定して行うことができないため、真の実践力の育成につながっているのかについては検討の余地があると考えられる。

さらに、保育現場におけるこの経験の有用性について言及されたものは散見されていない。

生活発表会は、保育の現場においても、運動会に匹敵する大きな行事である。行事の子どもたちの生活や発達における意義については言うまでもないが、保育者、特に若手においては心身ともに負担感のあるものであることは否めない。

中でも、「結果やできばえに過重な期待をしたりすることは、幼児の負担になるばかりでなく、ときには幼稚園生活の楽しさが失われることにも配慮³⁾しつつ、限られた時間の中で、発表会の「練習」はどうあればよいのか、目の前の子どもたちの様子を見ながら進めることのできない養成の段階で出来る経験は何なの

か、考えていく必要性を感じている。

以上の問題意識から、筆者は2017年度に現役の大学院生（現幼稚園教諭）との共同で、大学の授業で行う“模擬保育と振り返り”の保育現場における有用性と実践力について検討するために、模擬保育を保育の行事に向けて行う日々の活動と位置づけたうえで、連携や協働を伴うものではなく一人で実践する方法を試みた⁴⁾。

その結果、以下のことが示されている。

- ①本設定における実践はより保育の実際に近い経験であったこと
- ②絵本を題材としたことで、子どもの日常から派生した発表会の作品のテーマとして考えられたこと
- ③小道具を自分たちで制作するということや、実施後に子ども役の表現を見取り、次の活動への見通しを立てることについても、長期的なスパンで保育を計画しつつ、活動を具体化するという、より現場の実情に近い経験となったことである。

以上を踏まえ、本研究では、養成校の学部生の授業の中に、この設定の拡充として模擬保育の位置づけを行い、実践を報告しながら、成果について検証することを目的とする。

2. 方法

(1) 対象

国立大学法人A大学教育学部に所属する、2020年度後期の保育内容の指導法（身体表現）を受講している12名である。

授業の前半では、保育所保育指針や幼稚園教育要領（最新版）により領域「表現」のねらいや内容、乳幼児の発達と表現の育ちについて学びを深めるとともに、そこに身体表現がどのように関わっているのかを確認した。あわせて音楽をともなったリズムダンスや手遊びや歌遊びを用いながら、身体表現遊びへの展開や方法について実技を踏まえ、理解を深めた。授業の後半において模擬保育を行うこととした。

(2) 手続き

模擬保育の設定の理解のために、まず、保育における生活発表会について文献をもとに説明した。そこから本年度の模擬保育では、生活発表会にむけて作品を発表するまでの過程を日々の保育（模擬保育）の中でどう展開していくのか考えるという設定で、リレー式に模擬保育を展開すること、担当はその都度決めていくことを確認した。

時間的な制約を考慮して、題材と対象年齢は筆者が提示した。題材はテキスト⁵⁾から「パンダなりきりたいそう」⁶⁾の絵本を選択した。対象年齢は模倣遊びから次第に物語のストーリーを理解し表現できるようになる段階にある3歳児とした。生活発表会で披露する作品を創作し、発表までの過程でどのような活動が必要なのかを考え、模擬保育としての展開を考えることとした。

実施に当たり、下記の9項目（1当てはまらないから5当てはまるの五件法）と自由記述による感想からなる評価票を作成し無記名により評価を行い振り返りに供した。データについては実践者にフィードバックした。また、筆者がビデオ撮影を行い、必要に応じて振り返りに供することとした。

1. 声の大きさや発音、話し方が適切で、聞きやすかった
2. 教材や活動内容の説明が適切で、分かりやすかった
3. 子どもたちの興味や関心を引き出そうと工夫していた
4. 子どもたちへの声かけの内容が適切であった
5. 子どもたち全体に目を配り、一人ひとりの進み具合を把握しながら活動を進めていた
6. 生活発表会へ向けた取り組みの過程として適した活動内容だった
7. 時間配分が適切であった
8. 活動に対する熱意や意欲が感じられた
9. 総合評価

すべての実践終了後に、授業の最終レポートとして、1. 模擬保育実施について、評価から考えたこと
2. 1を踏まえ、生活発表会に向けた乳幼児期の身体表現活動はどうあったらよいと思うかの2点について記述してもらった。今回は模擬保育実施を踏まえ、身体表現活動についてどう捉えたのか検証するため、2の項目についての記述を分析対象とした。

(3) 倫理的配慮

評価票については、役割以外は無記名とした。さらに結果は統計的な処理がなされるため、個人の特定につながらないこと、授業改善に資する目的で研究資料とすることを説明し承諾を得た。

3. 結果と考察

(1) 模擬保育実施計画

実施計画については、模擬保育実施前の授業において、あらかじめ受講者それぞれに考えてきてもらった内容を発表してもらいながら、適宜グループワークを行い、受講者全体で共有していった。

まず、発表会をふまえた模擬保育設定にあたり、実施の基本となるねらいを幼稚園教育要領などを手掛かりとして、以下のように決めた。

- ・他者に自分の表現を披露し楽しさや喜びを味わう
- ・自分の中にあるイメージを膨らませ、体を使ってなりきることを通して思い思いに表現することを楽しむ
- ・なりきる対象は「生活や遊びの中で興味のあることや身近なもの」とする

次にどんな活動が必要と考えられるか、またその活動を発表会までの流れとしてどう位置付けられるか決めていった。そこで舞台での作品構成とクラスの規模について考えておく必要性に気づき、クラス規模を3歳児男児7人女児7人の計14名構成とすることにし、作品構成としては、最初に全員が舞台上で演技をしてから、何人かのグループ（テーマごと）にわけそれぞれ披露してから、最後に全員でエンディングとすることとした。

さらに、題材となる絵本を参照しながら、子どもがどこを楽しむか、動きはどのようなものが想定できるか意見を出し合いながら、発表会までの活動の流れ（活動計画）を決めていった。最終的には以下の順に行う設定となった。

1. 絵本の読み聞かせ
2. 絵本の中にあるものでなりきり遊び
3. 自分のなりたいもの探し
4. なりたいもの発表とグループ決め
5. 音や音楽に合わせての活動
6. お面や装飾づくり
7. リハーサル

一般的な模擬保育の多くは、グループごとに活動内容を決めるというところから始まると考えられるが、本研究では生活発表会という行事に発表する作品を作っていく過程を活動内容として考えていくということで、クラスの年齢や人数、子どもたちの発達を考えて具体的な内容を決めたり、展開したりということを受講学生全員で共有することが必要でかつ可能となることがわかった。

実習の経験など、それまでの子どもとかかわる機会や考え方はそれぞれ違うため、子どもの発達を踏まえたうえで模擬保育全体としてのねらいを全員で考え共有できることは、模擬保育後の振り返りもそこから始められるため、それぞれの振り返りの深化に影響を与えることが推察された。

(2) 実際の活動とねらいおよび特徴

上記の活動の流れが、実際にどのような活動となって実践されたのかを表1に示す。

具体的には6つの実践となった。活動計画の5. 音や音楽に合わせての活動は、具体的な活動とはならなかったが、実践6のリハーサルで「子どもの動きを妨

表1 各実践における活動内容とねらい（カッコ内は受講者の担当体制）

	活動内容	ねらい
実践1（単独）	絵本の読み聞かせ	絵本の世界に触れ、なりきり遊びへの意欲を高める
実践2（TT）	絵本に出てくるもののなりきり遊び	自分の中のイメージをふくらませ、友達となりきって表現する楽しさを味わう
実践3（TT）	自分のなりたいもの探し	ゲームを通してなりきって表現することを楽しむ なりきったものを友達に伝えたり、友達のなりきったものを考えたりすることで、自分のなりたいもののイメージをふくらませる
実践4（TT）	自分のなりたいものを決めて発表	他者に自分の表現を披露し、楽しさや喜びを味わう 体を使って思い思いに表現することを楽しむ
実践5（TT）	お面を作ろう	自分がなりきりたいものについてイメージをふくらませ、色塗りなどを通して表現することを楽しむ
実践6（TT）	生活発表会のリハーサル	リハーサルを行うことで、本番への自信をもち、人前で発表することの楽しさを味わう

げないが、雰囲気盛り上げるためのBGM」として選曲、使用されており、音楽の使用は合わせて動いたり踊ったりするだけでない活用方法を学生全員が認識することとなった。

各活動において、実践にどのような特徴があったのかを、各回の評価の平均値との比較（表2参照）と、実施後の実践者の振り返り（表3参照）をもとに検討した。

実践1「絵本の読み聞かせ」では、教材や活動内容、子どもたちの興味関心を引き出す項目が他項目に比して高く、作品創作の導入として絵本の特徴を読み解き提示できたことが推察された。また、時間配分と子どもたち全体や個人へのかかわりが他の実践の同項目に比して低かったことについては、実践者が単独であったこと、声かけの内容や仕方については、第1回目の実践でもあり、参考となるような実践経験の不足が影響していることが考えられた。

実践2「絵本の中にあるものでなりきり遊び」では、教材、活動内容、子どもたちへの対応の値が他項目に比して高かった。TTで行ったこと、絵本の絵を画用紙に大きくわかりやすく提示したことで3歳でも動きやすい内容となったことが示された。また、この実践で最も高得点であった項目6については、前回の活動のつながりから適切な内容であったと評価された結果であると考えられた。

実践3「自分のなりたいもの探し」では、このテーマからどのような活動をするか、実践者が苦労した実態が読み取れた。実際にはジェスチャーゲームとして、ゲーム的要素をいれながら、子どもたちが自分のやりたいことをみんなの前で表現できることを通して、なりたいものを探っていくという意図は評価されたところであったが、模擬保育として進めるうえで、教材や活動内容の説明、声かけが不十分である評価がなされたことが推察された。

実践4「なりたいもの発表とグループ決め」では、実践の平均が他実践の平均よりも一番高く、実践面、内容ともに充実していたことが考えられた。この実践はTTで行われ、役割分担がはっきりしていて連携が取れていたことや、発表会の中で自分のなりたいものを決めるという、子どもが生活発表会に向かう気持ちを高めていくうえで重要な活動内容であったこともあり、実践者がそれを意識し意欲を持って取り組めた活動であったことがうかがえた。

実践5「お面や装飾づくり」は、身体を動かす活動ではなかったが、声かけや説明、子どもへの対応でも、興味や関心を引き出す工夫について他の実践に比し一番評価されていた。

また、実践者の振り返りからも声掛けの内容以外は触れられておらず、意欲や熱意においても高かったことから、実践者にとってこの制作中心の活動が他の活

表2 各実践の評価の平均値

実践	活動内容	評価項目									実践の平均
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	
1	絵本の読み聞かせ	4.1	4.2	4.3	3.9	3.5	4.5	3.8	4.4	4.0	4.1
2	絵本の中にあるものでなりきり遊び	4.1	4.4	4.4	4.4	4.4	4.6	4.5	4.5	4.2	4.4
3	自分のなりたいもの探し	4.0	3.8	4.3	3.9	4.5	4.3	4.3	4.6	3.9	4.2
4	なりたいもの発表とグループ決め	4.4	4.3	4.6	4.3	4.6	4.9	4.9	5.0	4.5	4.6
5	お面や装飾づくり	4.6	4.5	4.6	4.2	4.5	4.5	4.4	4.9	4.6	4.5
6	リハーサル	4.0	3.8	4.0	4.2	4.7	4.9	4.2	4.4	4.1	4.3
	評価項目の平均	4.2	4.2	4.4	4.1	4.4	4.6	4.3	4.6	4.2	4.3

評価項目の内容

1. 声の大きさや発音、話し方が適切で、聞きやすかった
2. 教材や活動内容の説明が適切で、わかりやすかった
3. 子どもたちの興味や関心を引き出そうと工夫していた
4. 子どもたちへの声かけの内容が適切であった
5. 子どもたち全体に目を配り、一人ひとりの進み具合を把握しながら活動を進めていた
6. 生活発表会へ向けた取り組みの過程として適した活動内容だった
7. 時間配分が適切であった
8. 活動に対する熱意や意欲が感じられた
9. 総合評価

表3 実践者の実践後の振り返り

実践回 (役割)	振り返りの内容
1 (単独)	子どもたちに対する声かけが単調であり良い声かけができなかった。 子どもの言葉で分かりやすく伝える力がまだまだ足りていないと感じた。
2 (T1)	全体を通して明るく楽しい雰囲気のできたので良かった。次の動きの誘導の仕方はあまりスムーズとはいえないものだったので、子どもの「まだそれになっていたい」という気持ちを尊重しつつ、全体の活動を進めていくのが難しかった。
2 (T2)	視覚資料(絵)を先に見せて、絵から動きにつなげていく方法もあったと思った。もっと有効的に使うべきだった。子ども役全員に声をかけたり、ほめたりできたのは良かった。
3 (T1)	子どもたちに向けて話すとき、伝わりにくい言葉だったり、早口で分かりにくかったりする部分があった。想定していたよりも「やりたい」の声が少なかったが、保育者の見本を何回も取り入れることでやりたいという気持ちを促すことができたと思う。全体的に個人を意識した声かけができていなかったと思った。
3 (T2)	ジェスチャーゲームで様々なイラストやポーズを見て、自分の興味あることやしたいことは何か考えるきっかけになったのではないかと思う。飽きてきた子、そもそもあまり関心を持てなかった子もいたので、時間配分にもう少し気を付けて行くと良かったと感じた。
4 (T1)	生活発表会に向けてということ意識して活動を構成するのが難しく、流れの作り方に悩んだ。イラストを見せてなりきってもらうだけでなく、言葉を聞いて動きをイメージできるようにしたが、子どもの分かりやすい言葉を使っていくのは難しかった。なりきり遊びをしている途中や発表後の声かけがもう少し出来たらよかったと思う。
4 (T2)	イラストだけでなく、言葉をたくさん使うことを意識した。生活発表会では、イラストを見ながらではなく、保育者の話す声を主に聞くことになると思ったので、それを考えながら取り組んだ。なりきりたいものを探るときに「それいいね!」等の肯定的な反応を向けようと頑張った。
5 (T1)	子どもが何をしたいかわからず間伸びしてしまっていたときがあったと感じた。体操の声かけなど、決まった言葉かけをしてあげたらもっと動きやすかったかなと思う。次の見通しを持てるような指示も十分ではなかったと感じたため、今は何をして良く、何をしてはいけないのかをもっと具体的に声かけが出来たらよかった。
5 (T2)	自分の声かけが子どもたちにどのような影響を与えているのかということ子どもそれぞれの動きがバラバラになっていくにつれ、全て考えられなくなってしまい、怖いと感じた。3歳の子どもたちの発達目標を把握しきれなくて自由な行動にどれくらい声かけを行うべきなのかわからなくなってしまったのが一番出来ていなかったことだと思った。
6 (T1)	T1だったが、話している時に、少し止まってしまったり、進まなくなってしまったり、適切な指示が出来ていなかったと感じた。もっと、今日の流れをしっかりと頭に入れておかないと、子どもにも戸惑いが伝わってしまうと感じた。T2とT3には分かりにくい指示に補う声かけをしてもらってずいぶん助かった。
6 (T2)	子どもが次に何をするのかの見通しが持てる声かけが少なかったと思った。全体的に盛り上がりにかけていたため、保育者が率先して声を出したり、手を叩いたり盛り上げることで子どもたちがノってくれるのではないかと思った。子どもの動きの想定やステージの規模が小さかったりとリハーサルに向けた深い追究ができていなかった。ただ、全体を通してこれを3歳児がやっていると考えるととてもかわいいなと思った。
6 (T3)	生活発表会となると、子どもたちがやりたいことを自由に行うことができるわけではないので、どうしたら保育者の指示を聞いて動いてくれるかを考えながら保育をするのが難しかった。一つ一つの行動を説明しなくてはならなかったため、子どもたちに分かりやすい声かけの重要性を考えさせられた。リハーサル中に「楽しくない」と言われて、どうしたら楽しくなりきり体操ができるのか工夫しなくてはならないと思った。リハーサルの時から臨機応変に対応し、本番で一番良いものができるようにしなくてはならないと思った。

動内容よりも実践しやすかったのではないかと考えられた。総合評価も他の実践に比し最も高かったことから評価する側にとっても高評価をつけやすい活動であったと推察することができる。また、筆者らの研究⁴⁾の結果として、小道具を自分たちで作ることが保育の計画の中で現場の実情に近かったことも踏まえると、発表会に向けた計画におけるこの活動の位置づけについてもその必要性は確認できたと捉えることができるのではないかと考えられる。

実践6「リハーサル」では、子どもたち全体への目配り、発表会に向けた取り組みとしての内容であることが他実践よりも評価されており、発表会の前の「リハーサル」という活動を意識して実践できたことがうかがえた。しかし、一方で、声かけや説明、子どもの興味関心、時間配分などで他実践よりも低かったことから、子ども主体で考えられるべき保育実践という捉えと、発表会の「リハーサル」という内容によりどうしても実践者が主導することが主となってしまった活動との間で、TTではあったものの、悩んだ状況が実践後の振り返りからも読みとれた。

以上より、実践ごとの特徴から、実践形態や実践者の子ども理解の程度の差、活動内容の具体化の難易度などが反映していたことが推察された。活動内容については、共通理解として全体で認識していたこともあり、担当する前回での振り返り後から立ち上げ、次回につなげるための内容を考え、工夫していたことがうかがえた。しかしながら、身体表現活動の保育実践は制作活動の実践よりも難しいと捉えられていることも見受けられ、本授業において模擬保育までの受講者の経験内容を吟味する必要性を感じた。

また、計画があることは必要なことと認識しながらも、具体化していく上での難しさについては、各実践において感じられるところであった。保育実践は積み重ねながら改善されていくものであると改めて実感させられたものの、この方法については再考の余地があると思われる。

(3) レポート記述分析

模擬保育の実践と評価を踏まえた、保育において生活発表会に向けた身体表現活動の在り方について得た記述を、KH Coder⁷⁾を用いてテキスト分析を行った。分析を実施する前に、いくつかの用語（生活発表会、身体表現活動、保育者など）については強制抽出する複合語として設定した。また、レポートによる文章上の表現として多用されているが内容として意味がない

と思われる語（思う、考える、感じるなど）については分析対象から省いた。分析結果として媒介中心性により色分け表示された語の共起ネットワークを図1に示した。

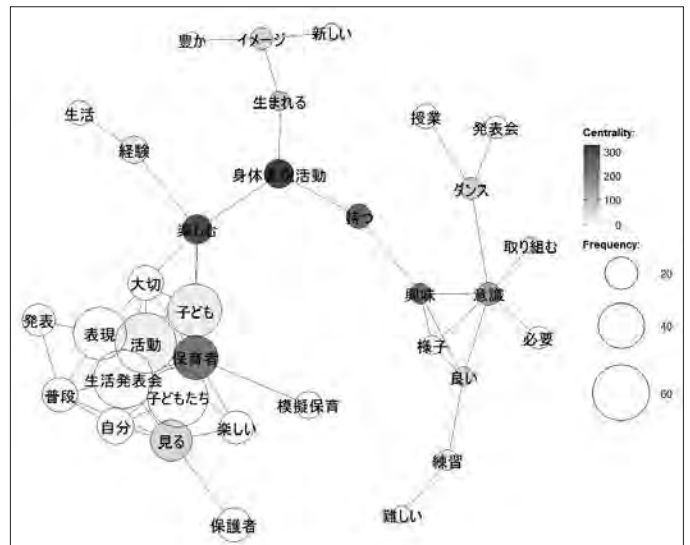


図1 レポート記述から得られた語の共起ネットワーク

これをみると、【身体表現活動】を中心に【楽しむ】【生まれる】【持つ】という3つ語につながっていることがわかった。

【楽しむ】は【生活】や【経験】と、また【保育者】や【子ども】と強いつながりを示した。保育者も子どももともに楽しむことが大切な活動と捉えていることがうかがえた。

さらに、【普段】という語ともつながり、この語が出てくる文節には「普段の活動」や「普段の生活」「普段の遊び」という言葉もあり、【生活発表会】は普段の活動から考えることと捉えたことがうかがえた。

そして、【見る】と【保護者】もつらなっており、保護者が子どもたちの成長を実感する行事としての認識も感じられた。

【持つ】は【興味】とつながり、【意識】や【様子】、【良い】や【取り組む】といった語ともつながっていた。子どもが興味を持っていることや興味が持てるように意識していくこと、【練習】が【難しい】と感じるからこその必要性を感じたことがうかがえた。

【生まれる】は【イメージ】、【新しい】、【豊か】という語とつながっていた。

新しい発見や豊かな感性ともかかわってイメージが生まれるという意識が感じられた。

4. 総合考察

生活発表会を視野にいれつつ、模擬保育を構想、実践、振り返りを行った結果、学生にどのような学びがあったのか以下のようにまとめられた。

まず、子どもの発達を理解するための経験となるものということであった。今回はグループごとに年齢を設定するのではなく、模擬保育全体を通して年齢を統一したことにより、実践が進むにつれてその年齢の発達理解も進み、活動を考えていくことができるようになっていった。特に活動の流れを全体で共有する際、3歳児を実習で担当したものに意見を聞きながら決まっていた経緯からも、発達に沿った活動を実践することは当たり前だが、それが一番大事なことであるということが認識できたのではないと思われる。

次に、見通しをもって実践することの経験である。前もって、計画があることでそれに沿った活動を決めること、前の実践を振り返りつつ、今回の実践があり、次の実践にもつながるように意識できたことが推察された。

さらに、身体表現活動は、保育者もワクワクできるような、子どもとともに楽しめる活動であることが大切という意識がされており、保育実践における表現活動の意義についても理解できていたと推察された。また、生活発表会を意識したことで、日ごろの保育で行っていることが作品になりうることや、保護者も楽しめ、友だちと一緒に達成感を味わえるということも大切であると捉えられたことが今回の模擬保育の設定から得られたことであった。

これまで筆者が取ってきた方法のように、単発的にしかも、自分の好きな内容で行われてきた模擬保育と振り返りでは気づけなかったこと、感じられなかったことを経験できたことが推察された。しかしながら、この方法は、実施年度の受講者の人数や、実習経験などに左右される度合いが大きく、どの活動を担当するかあらかじめ決められなかったこともあり、そのための負担が受講生にもあったように思われる。この方法を取り入れていくためには実際に子どもの表現活動を観察したり、子どもと関わる経験を少しでも多くしておく必要性を感じた。さらに、授業において身体表現活動の実践経験を模擬保育までにどのように積むことができるかについての検討も改善点として挙げておきたい。

本研究における学生の学びは、これまでの知見にも見られるように、保育者としての関わりや発達理解の

重要性、身体表現活動の在り方について実感できただけでなく、見通しの必要性や計画があることによる難しさや大切さに実践ベースで気づけたことにあると思われる。現職の保育者の意見も聞きながら、授業改善に役立てることにより、今後も養成と現場をつなぐ研究を続けていきたい。

付記

本研究は日本保育学会第74回大会で発表したものに加筆・修正を行ったものである。

文献

- 1) 杉村智子・安東綾子 (2018) 保育内容の指導法における模擬保育実践—能動的な共同による学びの視点から—。帝塚山大学現代生活学子育て支援センター紀要。第3号。77-87
- 2) 高原和子・瀧信子・矢野咲子 (2016) 保育内容(表現)身体表現指導における模擬保育後のふりかえりに関する一考察。福岡女学院大学紀要・人間関係学部編。第17号。23-28
- 3) 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説。フレーベル館。114
- 4) 藤元恭子・山地一輝 (2020) 園行事をふまえた模擬保育の構想—身体表現活動を中心に—。香川大学教育実践総合研究。第42号。1-12
- 5) 池田裕恵・猪崎弥生編著 (2019) 保育内容「表現」からだて感じる・表す・伝える。杏林書院
- 6) いりやまさとし (2016) パンダなりきりたいそう。講談社
- 7) 樋口耕一 (2014) 社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して。ナカニシヤ出版